

## 宗谷管内所在の狛犬

内山真澄<sup>1)</sup>・西谷榮治<sup>2)</sup>・藤沢隆史<sup>3)</sup>・高島孝宗<sup>4)</sup>・山谷文人<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup> 〒097-0022 北海道稚内市中央3-13-15 稚内市教育委員会

<sup>2)</sup> 〒097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町136 利尻町立博物館

<sup>3)</sup> 〒097-1201 北海道礼文郡礼文町香深村字ワウシ 礼文町教育委員会

<sup>4)</sup> 〒098-5823 北海道枝幸郡枝幸町三笠町 オホーツクミュージアムえさし

<sup>5)</sup> 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 利尻富士町教育委員会

## Distribution of Komainu in Souya, Northern Hokkaido

Masumi UCHIYAMA<sup>1)</sup>, Eiji NISHIYA<sup>2)</sup>, Takashi FUJISAWA<sup>3)</sup>, Takamune TAKABATAKE<sup>4)</sup> and Fumito YAMAYA<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup>Wakkanai city board of education, chuo, Wakkanai, Hokkaido, 097-0022 Japan

<sup>2)</sup>Rishiri town museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

<sup>3)</sup>Rebun town board of education, Kafuka, Rebun Is., Hokkaido, 097-1201 Japan

<sup>4)</sup>Esashi town museum, Mikasamachi, Esashi, Hokkaido, 098-5823 Japan

<sup>5)</sup>Rishirifuji town board of education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

**Abstract.** Komainu is the pair of stone guardian dogs at the gate of a Shinto shrine. Komainu are 29 pair at 27 Shinto shrine in Souya, Northern Hokkaido. These were built between the 30st year of Meiji and the 16st year of Heisei. In future, it is necessary that investigate along the Okhotsk Sea Coast and the Western Sea Coast of Hokkaido.

### はじめに

宗谷管内には近世以降に建立された神社が多数存在する。各神社には、各時代を通じて鳥居や石碑、絵馬などの奉納寄進物が数多く存在し、それらは文化的価値の高いものもある。

そのなかにあつて、神社の守り神である狛犬は、石工の技術や伝統をよく表わしており、先人達の信仰の証であるとともに、地域の歴史を伝える身近な文化財である。しかし、なかにはその存在自体が忘れ去られ、風化による損傷が激しいものもある。こうしたことから、管内9市町村に所在する狛犬の確認調査が急務となり、平成20年8月より行った宗谷管内巡回展「宗谷の狛犬」に先立って悉皆調査を実施した。

本稿は、調査によって確認された各狛犬について分

類・整理し、若干の考察を加え紹介するものである。

### 狛犬とは

狛犬は神社や寺院を守る役割を持つ想像上の動物の像である。神社の拝殿の前や参道の脇に向かい合わせに置かれている。一般的に社殿に向かって右側に口を開けた「阿像」、左側に口を閉じた「吽像」が置かれる。古い狛犬では吽像の方に角を一本つけているものもあり、これは吽像を「狛犬」、阿像を「獅子」として区分しているものとされる。

狛犬は、歴史的な背景や地域の伝統を色濃く受け継いでおり、最初に作られた地域や表現方法の違いから、「江戸系」「浪速系」「出雲系」「広島系」「岡崎系」など様々な様式に分類されている。狛犬の分類は、

表1. 宗谷管内における狛犬一覧

神社名	所在地	年代	奉納者	銘文	狛犬様式
1 声聞神社	稚内市声聞		寺西豊松	奉納 海上安全 大漁 加賀国上金口港 木材船主寺西豊松	安芸玉乗り
2 厳島神社	稚内市宗谷村宗谷	大正 12 年 (1923)	稲川長七・石上市太郎ほか 6 名	稲川長七・石上市太郎・岩泉口次郎・小野寺久太郎・渡辺嘉平・桜庭由吉・佐々木磯八・白石有隣 大正十二年十一月吉日 金五十口・盛口松 小山辰哉・口右刻	
3 三吉神社	稚内市中央 1 丁目	大正 12 年 (1923)	吉川源五郎	世話人 吉川源五郎 大正十二年七月十七日	出雲 吽像子持ち
4 北門神社 (参道下)	稚内市中央 1 丁目	昭和 17 年 (1942)	田淵太七	奉納 田淵太七 昭和十七年六月吉日	
5 北門神社 (拝殿前)	稚内市中央 1 丁目	平成 10 年 (1998)			岡崎現代
6 勇知神社	稚内市抜海村下勇知	昭和 32 年 (1957)	中野クメ・米澤スエノ	奉納 中野クメ・米澤スエノ 昭和三十二年十月三十一日	逆配置
7 岬神社	稚内市ノシャップ 2 丁目	昭和 37 年 (1962)		奉献	安芸玉乗り
8 沼川神社	稚内市声聞村沼川	昭和 53 年 (1978)	居島芳松・居島りん	昭和五十三年六月 居島芳松 昭和五十三年六月 居島りん	岡崎
9 宗谷岬神社	稚内市宗谷岬	平成 16 年 (2004)	稚内石材工業所	奉納 稚内石材工業所	岡崎現代 玉とり子とり
10 兜沼神社	豊富町上サロベツ西 16 線	昭和 21 年 (1946)	阿部健吉	奉納 昭和廿一年八月 阿部健吉	
11 豊富八幡神社	豊富町豊富大通 11 丁目		石村弥三郎ほか 10 名	奉納 石村弥三郎・畑慶篤・徳野保 常田鉄蔵・口藤豊作・福田貞次郎 小室靖・小林政雄・安田多市 佐藤栄五郎・瀬賀勝雄・イロハ順	
12 鬼志別神社	猿払村知来別	昭和 13 年 (1938)	清水徳太郎・条次郎・芳太郎	奉献 清水徳太郎・同条次郎・同芳太郎 旭川市梅原石工所刻 小樽花園 小野木材店 政村シユン・清水信行	岡崎
13 浜鬼志別神社	猿払村浜鬼志別	平成 15 年 (2003)	山口時男	奉納 寄贈 山口時男 平成十五年六月吉祥日	岡崎現代 玉とり子とり
14 浜頓別神社	浜頓別町浜頓別北四 条 1-20	昭和 15 年 (1940)	石田要助・尾崎清一ほか 4 名	奉納 昭和十五年七月十五日 石田要助・尾崎清一・折目一徳 向日清石・植松滝之進・菊池徳好	岡崎 玉とり子とり
15 中頓別神社 (前列)	中頓別町中頓別	大正 10 年 (1920)	亀岡藤一	奉納 大正拾年一月二日建設 亀岡藤一	江戸 逆配置
16 中頓別神社 (後列)	中頓別町中頓別				
17 松音知神社	中頓別町松音知				江戸
18 金刀比羅神社	枝幸町目梨泊	大正 14 年 (1925)	上野才一郎	奉納 大正十四年 上野才一郎	出雲
19 本幌別神社	枝幸町歌登本幌別	昭和 39 年 (1964)	岩木甚太郎	奉納 昭和三十九年七月 岩木甚太郎	岡崎現代
20 厳島神社	枝幸町新栄町	平成元年 (1989)		奉納 平成元年六月吉日	岡崎現代
21 沼浦神社	利尻富士町鬼脇沼浦	明治 30 年 (1897)	カネ七秋田舟川廻漕店・加藤浅治・沢木亀吉・石田千代吉・石垣善助	明治三十年西 カネ七秋田舟川廻漕店 加藤浅治・沢木亀吉・石田千代吉・石垣善助	出雲
22 利尻山神社	利尻富士町鷺泊本町	大正 11 年 (1922)	三上岩蔵・ムツ	奉納 大正十一年六月 三上岩蔵 ムツ	安芸玉乗り
23 北見神社	利尻富士町鬼脇	大正 13 年 (1924)	平埜茂吉	奉献	出雲
24 北見富士神社	利尻町杵形	昭和 3 年 (1928)	藤井興四蔵・品田初太郎	昭和三年六月二十五日奉納 寄附者 藤井興四蔵 品田初太郎	
25 礼文神社	礼文町船泊字大備	明治 38 年 (1905)	本藤茂助	奉献 寄附 越前國丹生郡鮎川 本藤茂助	出雲
26 知床神社	礼文町香深字知床	昭和 6 年 (1931)	九里寅次郎	奉納 昭和六年九月二十一日 九里寅次郎	逆配置
27 厳島神社	礼文町香深字入舟	昭和 34 年 (1959)	中村栄松・中村スエ	昭和三十四年 中村栄松・スエ 奉納 金婚記念	
28 差閉竜神社	礼文町香深字差閉				
29 大沼神社	礼文町船泊字ウエン ナイホ				江戸 吽像のみ



図1. 宗谷管内における狛犬分布図.

多くの研究者によって行われ一般書も出版されているが、統一されたものはない。そのため、本稿で扱う分類方法が必ずしも正しいとは限らないことをあらかじめお断りしておきたい。

現代の狛犬は画一的なものがほとんどであるが、昭和初期頃までに作られたものは、個性豊かで石工の技術や独創性が反映されている。また、狛犬の台座には奉納者の氏名や年代、石工の名前などが刻まれており、狛犬の一つひとつに物語があるといえる。

### 管内に所在する狛犬

調査により、管内 27 神社に 29 対の狛犬が存在することが判明している（表1・図1）。その内訳は、稚内市 8 社 9 対、豊富町 2 社 2 対、猿払村 2 社 2 対、浜頓別町 1 社 1 対、中頓別町 2 社 3 対、枝幸町 3 社 3 対、利尻富士町 3 社 3 対、利尻町 1 社 1 対、礼文町 5 社 5 対である。その年代は、判明しているだけで明治 30 年から平成 16 年まであり、明治期 2 例、大正期 6 例、昭和戦前期 5 例、戦後期 6 例、平成期 4 例、不明 6 例である。

なお過去に存在したが、何らかの事由で現在消滅しているものや稲荷神社の狐像については調査対象外としている。

各市町村所在の神社・狛犬の調査担当者および文責については、市町村名横に付したとおりである。

### 稚内市（内山）

#### 声問神社（稚内市声問）

明治 25 年、声問地区住民の信仰の対象を求める声に応じ、ウェンノチに小祠を建立し、天照大神ほか 2 神を祀ったのが声問神社の起源である。国鉄天北線の開通のために現在地に移動されたが、地区の住民によって大切に信仰が守られている。

狛犬（図2）は、御影石（花崗岩）を石材としており白く堅固、保存状態は良好である。奉納年代は不明だが、台座に刻まれた銘文には「加賀国上金口港木材船主寺西豊松」とある。明治から大正時代にかけて、声問川の流域では大量の木材を流送して海上輸送していたことから、この狛犬は石川県からはるばる運ばれたものかもしれない。



図 2-9. 各神社の狛犬 (左: 吽像, 右: 阿像, 図 7 は逆配置). 2: 声聞神社, 3: 巖島神社, 4: 三吉神社, 5: 北門神社 (参道下), 6: 北門神社 (拝殿前), 7: 勇知神社, 8: 岬神社, 9: 沼川神社.

阿吽のどちらの像も大きな玉に前脚を乗せている。広島県を中心に分布するいわゆる「安芸玉乗り」様式の狛犬であろう。

### 厳島神社（稚内市宗谷村宗谷）

厳島神社は航海安全と大漁の神様として、江戸時代後期に漁場を経営する場所請負人によって宗谷地方に伝えられた。宗谷厳島神社はこの中で最も古く、天明2年に奉納された「鰐口」が現存している。江戸幕末期に宗谷場所を描いた「宗谷絵図」や「宗谷孟仙里図」には、南を向いた厳島神社が描かれている。

厳島神社は、はじめ現在の宗谷小学校の下にあり、100基を超える鳥居がトンネルのように並んでいたとされるが、海岸に近かったため腐食が著しく、昭和45年に保全のために現在地に移された。

狛犬（図3）も強い潮風を受けて柔らかな凝灰岩の風化が進み、表情はほとんど分からない。奉納者は稲川長七、石上市太郎ほか6名で、大正12年に奉納された。さらに狛犬を彫った石工の名と代金らしき「金五十…」という銘文が残されている。

### 三吉神社（稚内市中央1丁目）

三吉神社は秋田県の「太平山三吉神社」を中心とする「三吉霊神」を祀る神社である。伝説によれば太平城主鶴寿丸藤原三吉を神格化したものとされるが、中世から修験道の霊場として知られ、近世では秋田藩佐竹氏の保護を受けていた。三吉信仰は、秋田県を中心に東北地方に広く分布しており、秋田出身者が多く入植した北海道にも伝わった。

三吉神社は秋田県からの入植者が比較的多い宗谷地方の各地に点在している。狛犬（図4）は凝灰岩製で柔らかく、色調は暗緑灰色、風化は進んでいないが、所々に剥離があり年月を感じさせる。牡丹を浮き彫りした円形の盤台に乗り、吽像の方は子どもを抱えている。耳が長く垂れ下がるいわゆる「出雲系」の様式で作られているが、石材は出雲の来待石（砂岩）ではない。

奉納は吉川源五郎（大正12年7月）。この年から稚泊連絡船の運航が始まり、稚内発展の大きな契機となった。

### 北門神社（稚内市中央1丁目）

北門神社は宗谷地方でもっとも古い歴史をもつ神社の一つである。江戸時代後期の天明5年、場所請負人の村山伝兵衛が航海安全と大漁の守護神として天照大神を祀ったことを起源としている。「ソウヤ大神宮」と称され、宗谷場所に集まった人びとの信仰を集め、天保2年に柏屋藤野喜兵衛によって見晴ヶ丘に遷座、さらに現在地に移ってきた。

北門神社には2対の狛犬が奉納されており、参道の石段下に配された方が古い狛犬である。この狛犬（図5）は暗緑灰色の凝灰岩製で石質は柔らかく、保存状態は良好である。奉納者は田渕太七。狛犬が奉納された昭和17年は稚内港の浚渫工事が始まった年でもある。

拝殿前の狛犬（図6）は白い御影石（花崗岩）を石材としており、円形の台座に乗った現代的な形態である。もともとは大正10年に奉納された狛犬があったが、平成10年に交替した。

### 勇知神社（稚内市抜海村下勇知）

勇知神社のある稚内市下勇知は日本海側の酪農地帯。神社の起源は明治35年にさかのぼる。その後、正確な年代は不明だが、焼失と再建を経て、昭和12年には近隣の三吉神社と統合し、三吉大神を合祀している。例大祭は毎年7月30日、現在では町内会長が神社の管理者となっている。

狛犬（図7）は、石材に柔らかな凝灰岩を使っているが、風化はあまり進んでいない。色調は暗緑灰色。設置された位置が低く、狛犬も小振りなため、下から上目遣いに見上げるような姿勢になっている。目と口は彩色され、目には腫も描き込まれている。通常は、吽像を向かって左、阿像を向かって右に配置するが、この狛犬は逆になっている。奉納者は中野ソメ・米澤スエノ、奉納年代は昭和32年と記されている。類例の少ない個性的な狛犬と言えるであろう。

### 岬神社（稚内市ノシャップ2丁目）

岬神社のある野寒布岬は遠浅で海の難所として知られている。江戸後期に宗谷場所を請け負った柏屋の持ち船がここで大時化にあい、船頭が岬にむかって龍神



図 10-17. 各神社の狛犬 (左: 吽像, 右: 阿像。図 16 は逆配置)。10: 宗谷岬神社, 11: 兜沼神社, 12: 豊富八幡神社, 13: 鬼志別神社, 14: 浜鬼志別神社, 15: 浜頓別神社, 16: 中頓別神社 (前列), 17: 中頓別神社 (後列)。

様に祈り続けたところ、危機を脱することができたという伝説がある。このときに命綱の錨を上げてみるとツメに大きな石がひっかかっており、これを祀ったのが神社の創始とされている。

創建当時、奉納する予定の鳥居を運んでいた船が、時化によって神社の沖合 400m の地点に沈没したという伝説がある。この伝説の鳥居は、昭和 63 年と平成 4 年に相次いで発見され無事に引き揚げられた。

狛犬（図 8）は昭和 37 年の開基 120 年を記念して奉納されたもので、白い御影石（花崗岩）を石材としており、保存状態は良好である。

阿吽のどちらの像も大きな玉に前脚を乗せている広島県を中心に分布するいわゆる「安芸玉乗り」様式の狛犬である。

#### 沼川神社（稚内市声間村沼川）

沼川神社の起源は大正 7 年頃にさかのぼる。当時の寺子屋式の私設教授場に氏神様と称した棒標を立ててお祀りしていたようである。その後、大正 11 年に国鉄宗谷本線が開通した折に、沼川地区の神社として建立された。例大祭は当初、秋に行われていたが、天候や農作業の関係から現在では 7 月 15 日になっている。

狛犬（図 9）は、御影石（花崗岩）を石材として使用しており、白くて堅固、保存状態は良好である。目と歯を白く彩色し、目には水色の瞳を描き込んでいる。毛先が大きく巻き込んで円盤状となり、歯は平歯、耳は立て耳として表現された現代的な狛犬で、いわゆる「岡崎様式」に分類される。

昭和 53 年に居島芳松・リン夫妻によって奉納された。居島夫妻は沼川地区開拓の草分け的存在で、神社との関わりの深い方だったと伝えられている。

#### 宗谷岬神社（稚内市宗谷岬）

宗谷岬神社の祭神は市杵島姫命。宗谷管内に広く分布する厳島神社の一つである。記録によれば明治 22 年尻臼（現在の宗谷岬付近）に厳島神社建立とあり、以来、大岬地区の住民の厚い信仰を集めてきた。平成 13 年には現在地に移転したが、旧神社に奉納されていた石灯籠は風化が激しく銘文は判読不能になっている。

狛犬（図 10）は、白い御影石（花崗岩）を石材に使っており、堅固。保存状態はきわめて良好である。円盤状に巻いた毛先や立ち耳などの特徴からいわゆる「岡崎現代様式」と考えられる。吽像の足下に子どもがおり、阿像は玉を転がしているので、「玉とり子とり」という意匠を表現しているであろう。

この狛犬は稚内石材工業所奉納によるもので、奉納年代は平成 16 年。今のところ宗谷地方では製作年代がもっとも新しい狛犬である。

#### 豊富町（内山）

##### 兜沼神社（豊富町上サロベツ西 16 線）

兜沼神社の創建は明治 42 年にさかのぼる。祭神は天照大神と春日大神。昭和 5 年に社殿の老朽化のために、兜沼湖畔にあった歌舞登神社と合併し、同社の祭神である市杵島姫命とともに祀ることになった。例祭日は氏子一同の希望をいれ、毎年 7 月 25 日とされ、現在に至るまで地域住民によって大切にお祀りされている。

兜沼神社は平成 2 年に社殿が新築されたが、狛犬や鳥居、手水舎などは奉納された当時のままの姿をとどめている。

狛犬（図 11）は暗灰色の玄武岩質安山岩を石材としている。台座の上で蹲踞しているが、足を踏み外しそうになっている。丸顔でユーモラスな表情がとても印象的である。奉納者は阿部健吉。台座には昭和 21 年 8 月に奉納したことが刻まれている。終戦直後の厳しい時期であるが、狛犬の明るい表情はやがて来る新たな時代を見据えているかのようである。

##### 豊富八幡神社（豊富町豊富大通 11 丁目）

豊富八幡神社は豊富町でもっとも古い由緒をもつ神社である。明治元年、嘉納治郎作が京都男山八幡宮の御分霊を奉戴し、さらに長男の久三郎が明治 40 年に豊富に移した。団体入植者が増加する中、八幡神社は豊富市街が形成されていくなかで、その中心であり続けた。昭和 3 年には無格社の社格をうけ、現在でも祭礼が執り行われている。

豊富八幡神社は豊富の開拓の歴史とともにその歩みを重ねてきた。境内には地域住民によって狛犬をはじめ

め鳥居や石灯籠、手水舎など様々な付帯施設が奉納されており、忠魂碑や聖徳太子堂も一緒にまつられている。

阿吽一對の狛犬(図12)を奉納したのは石村弥三郎ほか多数。奉納者の名前がイロハ順に刻み込まれている。奉納年代は不明であるが、堅い灰白色の御影石(花崗岩)を丁寧に彫りだして作られており、保存状態は良好である。

### 猿払村(高島)

#### 鬼志別神社(猿払村知来別)

鬼志別神社の起源は、大正初期に現在の鬼志別郊外に建立された小祠にさかのぼる。その後、国鉄宗谷線(後の天北線)の敷設工事が進み、鬼志別に市街が形成され始めた大正6年、当時の中鬼志別原野に神社が建立された。創建当時は「熊野神社」と称していたが、大正13年の分村とともに鬼志別神社として村社になった。

狛犬(図13)は暗灰色の御影石(花崗岩)を石材に使っており、保存状態は比較的良好である。いわゆる「岡崎様式」の狛犬であるが毛先の渦が小さく数も少なく、全体的に洗練された印象を受ける。

この狛犬は旭川の梅原石工所で生まれ、昭和13年に清水徳太郎・条次郎・芳太郎の三人によって奉納されたことが銘文に記されている。浜鬼志別神社狛犬、浜頓別神社狛犬と同様に「玉とり子とり」の意匠を採用している。

#### 浜鬼志別神社(猿払村浜鬼志別)

宗谷地方の発展は漁場を中心に海岸から始まったとされる。明治30年代の後半、浜鬼志別は浜猿払と並んでニシンの豊漁にわき、定住者が増加した。明治41年に住居や番屋などが建ち並んで市街が形成されると、漁業の守護神として祀られてきた小祠を浜鬼志別神社として建立することになり、神社は現在も大切に伝えられている。

狛犬(図14)は堅い御影石(花崗岩)を石材としており、暗灰色。保存状態はきわめて良好である。台座には平成15年に奉納されたことが刻まれており、宗谷地方では稚内市の宗谷岬神社の狛犬に次ぐ新しさで

ある。

様式化された円盤状の巻き毛や立ち耳、平歯などの表現からいわゆる「岡崎現代様式」と考えられる。吽像に子ども、阿像に玉をもつ「玉とり子とり」となっており、昭和初期に奉納された鬼志別神社狛犬の様式を踏襲している。

### 浜頓別町(高島)

#### 浜頓別神社(浜頓別町浜頓別北4条1-20)

北オホーツク地方の内陸部への開拓を急速に進めた要因として鉄道の開通が上げられる。大正初期に鉄道が開通した浜頓別では市街の形成が進み、神社建立の機運が高まった。大正8年には現在地に社殿が建立され、さらに昭和11年に神明造りの社殿を新築した。昭和17年には村社となり、頓別村、のちの浜頓別町の歩みを見守ってきた。

狛犬(図15)は白色の御影石(花崗岩)を石材としており、保存状態は良好である。いわゆる「岡崎様式」で製作されているが、岡崎現代様式の狛犬と比べると毛先の円盤が小型で渦の数も少なく、耳はほぼ水平に表現されている。

昭和15年に石田要助、尾崎清一ほか4名によって奉納されている。「玉とり子とり」の意匠を採用しており、昭和13年に製作された鬼志別神社狛犬とよく似ているが、こちらの方がやや表現が簡素になっている。石工は札幌の苅部石材店。

### 中頓別町(高島)

#### 中頓別神社(中頓別町中頓別)

中頓別の開拓はうっそうと生い茂る原生林を切り開いて行われた。原野を開いて集落ができると、人びとは学校の建設と神社の建立に心をくだいた。中頓別神社の起源は、明治年間に原野三六線に移住した開拓者達が小さな祠を祀ったことに始まる。その後の移住者の増加によって、多くの人びとが信仰するようになったのである。

中頓別神社の狛犬は2対あり、前列に配されている方(図16)が先代のような。大正10年に亀岡藤一が奉納したもので、暗灰色の凝灰岩を石材に使っている。阿吽の像の位置が通常と反対になっており、カー





図 18-25、各神社の狛犬 (左: 吽像, 右: 阿像)。18: 松音知神社, 19: 金刀比羅神社, 20: 本幌別神社, 21: 巖島神社, 22: 沼浦神社, 23: 利尻山神社, 24: 北見神社, 25: 北見富士神社。

ルした前髪にユーモラスな表情を浮かべた特徴的な狛犬である。

後列のもう1対(図17)は銘文がないため、奉納年代は不明である。前髪がないかわりに太い眉があり、ぎょろりとした大きな目には腫が描き込まれている。

### 松音知神社(中頓別町松音知)

北海道の開拓にあたって本州から集団で入植することは珍しくない。中頓別町松音知には鹿児島から入植した人びとが「薩摩農場」を開いた。松音知神社は、大正4年に農場支配人の松山丈之助が北見の野付牛神社から分霊して祀ったのが起源と言われている。拝殿の扁額は松山の郷里の先輩、内閣総理大臣の松方正義の筆によるものである。

狛犬(図18)は暗灰色の凝灰岩を石材に使っており、表面は風化が進んで部分的に剥離している。特に吽像の方は傷みが激しく、首周りにひびが走っている。銘文がないため年代は不明であるが、神社が創建された大正年間から昭和初期に奉納された可能性が高いものと思われる。

カールした前髪に下向きの耳、歯は鋸歯状で背は丸みを帯びており、いわゆる「江戸系」狛犬の特徴が強く表れている。大きな目には白く彩色が施され、真ん中に黒く腫が描き込まれている。

### 枝幸町(高島)

#### 金刀比羅神社(枝幸町目梨泊)

金刀比羅神社は香川県琴平町の金刀比羅宮を総本社とし、その祭神である大物主神を祀る神社である。瀬戸内海の航海安全の神様として信仰を集め、江戸時代に船による物流が盛んになると全国に信仰が広がった。枝幸町の金刀比羅神社はオホーツク海に面する目梨泊地区に位置し、漁業関係者を中心に厚い信仰を集めている。

狛犬(図19)の石材には暗灰色の凝灰岩を使用しており、風化によって部分的に表面が剥離している。垂れ下がった耳や顔の特徴から「出雲」と呼ばれる様式で作られていることが分かる。いわゆる「出雲系」狛犬に多い砂岩系の石材を使用していないことから、地元の石工が彫ったものかもしれない。

狛犬は角柱状の石材を素材として彫り上げているが、阿像の顔は石材の角の形状がそのまま残っている。流れ毛も簡単な線刻で表現されるなど、特徴の多い狛犬である。

#### 本幌別神社(枝幸町歌登本幌別)

枝幸地方の開拓は漁場を中心に海岸線から始まったが、交通網の整備は内陸への発展を促した。歌登西部の本幌別地区は音威子府と境を接し、早くから農業が発達した地区である。明治の終わり頃には学校や駅通などの市街が形成され、神社を建立しようという機運が高まった。その後、市街を見下ろす小高い丘の上に移転し、現在に至っている。

昭和初期、枝幸内陸部の歌登地区では澱粉景気にわいていた。本幌別もその例外ではなく、澱粉工場を経営する大きな農家が多数あらわれた。現在、神社にのこる石灯籠や手水舎などは、いずれもこの時期に奉納されたものである。

狛犬(図20)は明灰色の花崗岩を石材として使用しており、保存状態は良好である。いわゆる「岡崎様式」で作られており、口の中を赤く着色している。富澤(1980)には唐獅子と表現されており、昭和39年に岩木甚太郎によって奉納された。

#### 巖島神社(枝幸町新栄町)

市杵島姫命を祀る巖島神社は古くから航海安全の守護神として信仰を集めてきた。江戸時代後期、宗谷地方に次々と漁場が開かれるのにしたがって各地に巖島神社が建立された。枝幸の巖島神社の創建は文化年間以降の時期にさかのぼる。枝幸地方で最も古い歴史を持つ神社として長い間、地域住民の生活を見守り続けている。

巖島神社の狛犬(図21)は、平成6年に奉納された比較的新しいものである。白色の花崗岩を使用しており、保存状態はとても良好である。いわゆる「岡崎様式」で彫られているが、頭が大きく目がはつきりとしていてより現代的な印象を受ける。

昭和15年の枝幸大火以前に撮影された写真には拝殿の前に狛犬が写っており、先代が存在したことが分かる。はつきりとした写真はないが、やはり岡崎様式で

猿払の鬼志別神社の狛犬と似ているようである。

### 利尻富士町（山谷）

#### 沼浦神社（利尻富士町鬼脇沼浦）

沼浦神社は、明治30年5月23日に勧請された。現存する社殿は、創立当時のままで、建立した棟梁は秋田県河辺郡仁井田（現在の秋田市内）の堀井寅蔵とされている。沼浦地区は、秋田出身者の入植が多く、狛犬や石灯籠も秋田出身者による奉納である。参道の入口には、昭和7年建立の太平山三吉神社の石碑が残る。本祭は、6月24日であったが、現在は28日となっている。

沼浦神社の狛犬（図22）は、腰を上げて構え飛びかかるようないわゆる「出雲様式」に近いものと考えられる。石材は、島内ではみられない砂岩質のものであることから島外から持ち込まれたとみられる。社殿建立に伴い、明治30年にカネ七秋田舟川回漕店 加藤浅治、沢木亀吉、石田千代吉、石垣善助により、石灯籠とともに奉納された。年代が判明している中では、管内で最も古い狛犬である。保存状態は、石質が脆いため剥落した部分が目立ってきている。

#### 利尻山神社（利尻富士町鴛泊本町）

利尻山神社は、文政年間に場所請負人恵比須屋支配人源兵衛が勧請したとされる。明治9年村社となり、明治28年本泊から鴛泊へ遷座、明治32年に社殿を増改修築された。現在の社殿は、平成12年に改修築されたものである。昭和54年には、境内そのものが町の有形文化財に指定されている。例大祭は、毎年7月1日に行われている。

利尻山神社の狛犬（図23）は、前足を玉に乗せたいわゆる「安芸玉乗り」の様式に近いものと考えられる。石材は、御影石（花崗岩）を用い保存状態も良好である。尾を上向きにし、耳を立て顔を上げたようすは、とても迫力がある。大正11年6月に三上岩蔵とムツによって奉納された。ちなみに、奉納者である三上岩蔵については、澤（1914, 1918）によれば、鴛泊村ウエンベツにおいて漁業を営み、株式会社鴛泊回漕店専務取締役、三上旅館主などを歴任した人物とされる。

#### 北見神社（利尻富士町鬼脇）

北見神社は、文政8年場所請負人藤野喜兵衛が漁場を開くのに伴い勧請したとされる。明治32年、北見神社として創立され、明治43年鬼脇村の村社に、大正5年には現在地へ遷座された。現在の社殿は、昭和46年に改築されたものである。昭和54年には、境内そのものが町の有形文化財に指定されている。本祭は、毎年6月28日に行われている。

北見神社の狛犬（図24）は、お座りのような格好をしたいわゆる「出雲」の様式に近いものと考えられる。石質は、砂岩質である。このタイプの特徴として、眉は太くつり上がり、耳は垂れ耳で鼻は獅子鼻で大きく、真ん中で2つにわかれた短めのおごひげがある。大正13年9月に平埜茂吉により奉納された。ちなみに、奉納者の平埜茂吉は、大正時代に鬼脇村村会議員であった人物である。

### 利尻町（西谷）

#### 北見富士神社（利尻町杵形）

北見富士神社の起源は、明治26年に大宮謙次郎が出漁中に海中より授かったとされる奇岩を祀ったことに始まる。その後、明治30年の杵形大火によって社殿は焼失したが、3年後の明治33年には現在地に再建、さらに明治43年には杵形村社に昇格した。社殿は平成6年に新築され、現在でも杵形地区の住民によって大切に守られている。

北見富士神社は杵形村社として古くから地域住民の信仰を集めてきた。境内には大正4年建立の御大札祈念碑や昭和40年頃に建立された稲荷社があり、度重なる大火を乗り越えて現在に至っている。

狛犬（図25）は、白い御影石（花崗岩）を石材に使用しており、保存状態は比較的良好である。全体的にずんぐりしており、顔もユーモラスで親しみのもてる狛犬である。昭和3年6月25日に藤井興四蔵、品田初太郎の両名によって奉納された。奉納した品田初太郎は北見富士神社氏子総代を昭和6年11月から昭和7年4月まで勤めている。

### 礼文町（藤沢）

#### 礼文神社（礼文町船泊大備）

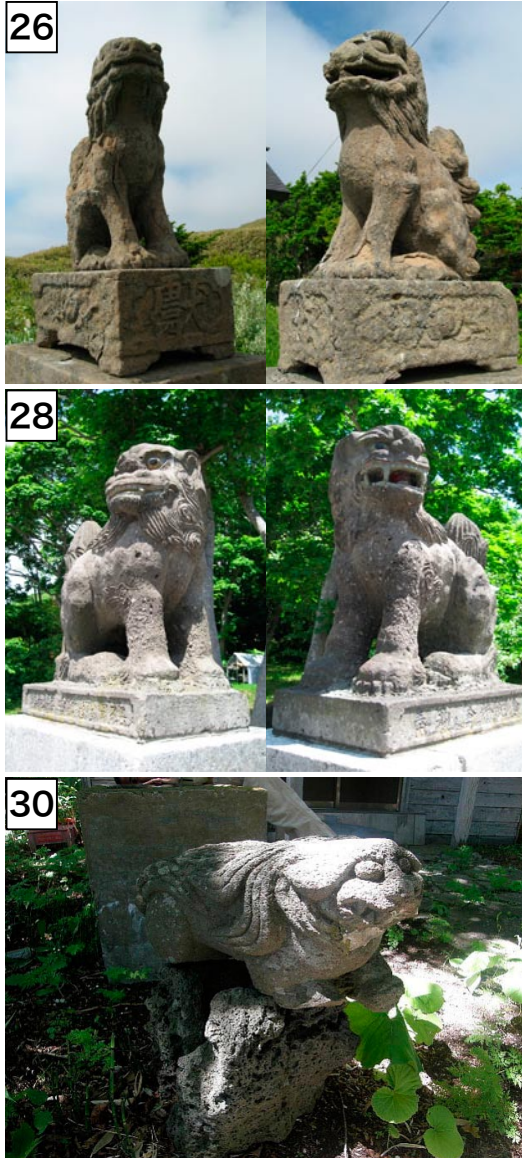


図 26-30. 各神社の狛犬 (左: 吽像, 右: 阿像. 図 27 は逆配置, 図 30 は吽像のみ). 26: 礼文神社, 27: 知床神社, 28: 巖島神社, 29: 差閉竜神社, 30: 大沼神社.

礼文神社は文久3年頃に、青森県人秋田左吉らが船泊地区に所在する久種湖の神霊を祀るため、その湖畔に祠を建てたのが創祀と伝えられている。明治32年までは沼神社と称していたが、山形県人藤森正隆らが発起人となって社殿改築、神職招聘等に努め、同35に社号公称許可、同36年に現在地に社殿が完成、大正15年に村社となり現在に至っている。

礼文神社の狛犬(図26)は、明治38年春に越前国鮎川出身(現在の福井県福井市鮎川町)の本藤茂助によって奉納されたものである。その年代から、創建

当時に奉納された貴重なものであり、かつ、礼文島内で年代の判明している中で最も古いものと言える。

また、奉納されてから長い年月が経過しているため、狛犬本体及び台座の表面はかなり風化が進み、やや崩れかかっているものの、首周りや尾の表現はしっかりと残されている。

#### 知床神社(礼文町香深知床)

知床神社は、南端部の知床地域における中心的神社で、奉納品の年代等から、明治の中頃から後半

にかけて社殿を整えたと思われる。その後、学校用地との関係から社殿は2回場所を変え、さらに、昭和52年には社殿を廃して、新築した自治会館へご神体を納めることとなった。しかし、地域において社殿建立の機運が高まったことから、現在地へ社殿を新築して現在に至っている。

狛犬(図27)は、全体的に若干風化が進んでいるが、朱塗りされてやや大きめに開けた口や粗めの体毛、足の先などがしっかりと表現されている。台座には奉納年代と奉納者が彫刻されており、昭和6年9月21日、九里寅次郎と記されている。渡辺(1940)によれば、九里寅次郎は厳島神社の知床地区氏子総代を務めていた人物であった。

なお、口を開けた阿像が向かって左側に、口を閉じた吽像が右側に配置されており、一般的な配置とは逆になっている。

#### 厳島神社(礼文町香深入舟)

厳島神社は、文化元年に宗谷場所請負人であった藤野喜兵衛が松前から市杵島姫命を奉遷、その支配人である岡田半兵衛が会所前地区に祠を建てて弁天社としたのが創祀と言われている。明治5年頃に弁天社から厳島神社へと改称、同9年に村社となる。明治19年に社殿を建立したが、同22年に土砂崩れによって社殿等が崩壊したため、社殿を現在地へ移し、昭和7年に三吉大神、同8年に事代主命を合祀し、同21年に宗教法人となって現在に至っている。

狛犬(図28)は、昭和34年に中村栄松・スエ夫妻によって奉納されたものである。前足部分はやや風化しているが、色彩を施された目や口、鋭い牙や整然とした歯並び、密な彫刻による尾や体毛の表現など、2体とも非常に凛々しい風情を漂わせている。

なお、台座には奉納年と奉納者名に加えて「金婚記念」と彫られており、結婚50周年の記念として奉納されたことがわかる。

#### 差閉竜神社(礼文町香深差閉)

差閉竜神社は、正確な創建年代などの記録はないが、幕末の安政年間に描かれた絵図には祠が記されていることから、古くから漁場開拓が進んでいたこの地域

一帯の信仰を集めていたようである。なお、現社殿裏側の斜面には階段が残されその上の平坦面には基礎等が残されていることから、かつての社殿は現在地より一段高い位置に建てられていた。

狛犬の奉納された年代や奉納者に関する記録は全くないが、明治31年に漁場関係者らによって竜王殿と記された額が奉納されていることから、この頃には既に社殿が整えられていたようである。

狛犬(図29)は全体的に灰色が強く、目や体の一部が欠けているが、尾の細かな表現や渦巻き状の体毛などは比較的よく残されている。ただ一般的に、口を開けた阿像は向かって右側に、口を閉じた吽像は向かって左側に配置されるが、ここでは左右反対に配置されている。

#### 大沼神社(礼文町船泊ウエンナイホ)

礼文島の発展は、北部の船泊と南部の香深を中心に進んだ。古くから漁業によって繁栄した船泊地区の背後には久種湖が広がっている。明治32年、この久種湖近郊に住んでいた藤倉平吉・ナツ夫妻が小さな社を建てて神様を祀ったのが起源とされている。同35年には重兵衛沢付近の人びとによって社殿が建立され、氏子12名が地域の神社として維持経営に当たることを申し合わせた。昭和2年には現在地へ社殿を移し、現在に至っている。

大沼神社の狛犬(図30)は向かって左側の「吽像」しか現存していない。明灰色の凝灰岩を石材として使用しており、風化が進んでいる。下あごや脚などが大きく破損し、表面も一部剥落しているため本来の姿勢が分かりにくい、「伏せ」の姿勢をとっている大変珍しい狛犬である。

体にはりついた尾やのこぎりのような歯、横に伏せた耳などいわゆる「江戸系」の狛犬の特徴が認められるが、詳しくは分かっていない。

奉納者や奉納年代などを記した銘文がないことが惜しまれるが、奉納年代としては社殿建立時、社殿移転時などが推定される。

#### まとめ

本稿のまとめとして、各様式別の特徴を示しながら、

若干の考察をしてみたい。

いわゆる「岡崎様式」は、「現代様式」も含めると管内で8例ある。奉納年代は、昭和～平成までと比較的新しい年代に多く、稚内から枝幸方面に分布している。そのうち「玉とり子とり」の様式例が3例みられた。

広島県を中心に分布するいわゆる「安芸様式」は、3例ありすべて玉乗り様式である。

いわゆる「出雲様式」は5例で、奉納年代は明治～大正と古い。利尻富士町沼浦神社の狛犬が「構え型」であるのに対し、他の4例は「座型」である。なお、廣江（2007）では、稚内市三吉神社の狛犬は現地で作られたものではないかと指摘されている。

いわゆる「江戸様式」は、3例で中頓別町と礼文町に分布している。なかでも礼文町大沼神社の狛犬は、「伏せ」の姿勢をとった珍しいものである。

以上のように、宗谷管内には各様式の狛犬がほぼ万遍なく分布している。これが地域的な特色なのかどうかについては、今のところ具体的な手がかりはなく検討の余地がある。

さらに、狛犬を考えるうえで様式以外では石材も重要なポイントとなる。石材の多くは、鳥居などにも用いられた御影石あるいは凝灰岩など、宗谷地方では産出しないものがみられる。この背景には、明治以降隆盛を極めたニシン漁に伴う本州からの移住と北前船の流通が関係していると考えられる。

狛犬の道内における調査例は、まだまだ少ない。宗谷地方は日本海とオホーツク海の境界に位置することから、今後はそれぞれの沿岸域の特徴をとらえ比較していくことが必要であろう。さらに、様式の分類基準を統一していくことも今後の狛犬研究の課題といえる。

## 引用・参考文献

榎本守恵編，1971；枝幸町史・下巻。枝幸町役場。  
浜頓別町史編集委員会編，1995。浜頓別町史。浜頓別町役場。

廣江正幸，2004。出雲の狛犬について。古代文化研究 12: 117-139。

廣江正幸，2005。出雲の狛犬について(2)。古代文化研究 13: 83-119。

廣江正幸，2007。出雲の狛犬について(3)。古代文化研究 15: 77-105。

北海道開拓記念館，1988。北海道開拓記念館研究報告 8 離島社会の歴史と文化。

北海道神社庁誌編輯委員会編，1999。北海道神社庁誌。北海道神社庁。

中村明月，1950。道立公園となった礼文島香深村。  
中頓別町史編纂委員会，1997。中頓別町史。中頓別町役場。

丸浦正弘，2007。ほっかいどうの狛犬。中西出版。  
利尻富士町史編纂委員会編，1998。利尻富士町史。利尻富士町役場。

利尻町史編纂委員会編，2000。利尻町史通史編。利尻町役場。

澤石太，1914。北海道樺太社交倶楽部第11集。函館鴻文社。

澤石太，1918。開道五十年記念北海道。函館鴻文社。  
猿払村史編纂発行委員会編，1976。猿払村史。猿払村役場。

高津信行編，1972。礼文町史。礼文町役場。

富澤英編，1980。歌登町史。歌登町役場。

豊富町史編さん委員会編，1986。豊富町史。豊富町役場。

豊富町史編さん委員会編，2002。豊富町史第2巻。豊富町役場。

渡辺利三郎，1940。銃後の香深。

稚内市史編纂室編，1968。稚内市史。稚内市役所。  
稚内市史編さん委員会編，1999。稚内市史第2巻。稚内市役所。

矢島睿，1984。利尻島における神社信仰について。北海道開拓記念館調査報告 23: 95-104。